

---

# 太安万侶《おおのやすまる》古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病院の調査

春野一人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

太安万侶古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病院の調査

### 【Zコード】

Z5099Y

### 【作者名】

春野一人

### 【あらすじ】

古事記と日本書紀といった二つの歴史書が、同時に作成された。

両書ともかなり似通つた内容であるが、大きな違いもある。日本書紀に関しては、その後の官制歴史書である「続日本紀」に作成された記事が載せられているが、「古事記」については記載皆無である。「古事記」は巻頭に、太安万侶が、編者として、長々と文章を書いているので、それを本として、「

古事記」の作成が、日本書紀に十年ほど先立つことが知れるのみである。著名な酔いどれ詩人・田沼遼は入院ごとの歴史研究を出版し、

ちょっと人気を得ている。さて、今回のテーマは何か？

## 酔いどれ詩人、田沼遼『たぬまりょう』の入院

酔いどれ詩人、田沼 遼は、数年に一度体調を崩し、別荘行きと称して懇意な院長のいる、鎌倉海浜クリニックに入院するのが常なのだ。遼は詩のみでなく、洒脱な味わいのエッセイも書き、人気がある。読書好きの彼にしても病室では、いささか退屈である。このごろは、退屈ををまぎらわすのに彼は歴史の謎に取り組むことにしている。前回は邪馬台国のある場所、前々回は織田信長の本能寺の変をテーマに取り上げて、「酔いどれ詩人・海浜リゾート病院研究所 その一・邪馬台国はどこにあったか?」と「酔いどれ詩人・海浜リゾート病院研究所 その一・織田信長はなぜやすやすと本能寺で殺されてしまったか?」ずっと以前には「酔いどれ詩人・海浜別荘病院研究所・日本は何故不利な戦争に突入してしまったか?」など、シリーズとして出版されている。

さて今回は、どうしようと田沼 遼は特別室の病室から見える、鎌倉材木座の青い海を眺め眺めていた。「酔いどれ詩人」などという通称は、実は彼自身が名乗っているので、田沼は実はかなりきまじめな人で、キリスト教系清滝女子大学で講師の職も担っているのである。講議はもちろん、日本文学である。

軽くドアがノックされた。どうぞという田沼の声で入ってきたのは、文華爛漫社の女子編集社員、田村先生担当の三十台始め独身の山辺沙也香であった。甘いものが好きで日本酒も好きな彼女は、中背でやや肉がついた体型である。しかしながら和服を着せたら似合うだろうと思わせる、なかなかの目鼻立ちがととのつた美人である。「先生、また入院だそうですね。先生、お口寂しいかと思いまして、ノンアルコールビール一ダース持つてきましたよ」

「おいおい、その先生は辞めてくれよ。しかし、そのノンアルコールはいいね」

「でしょ? 気に入つていただけてよかったです。・・・ところで、

センセ、今回はテーマは、決めておられます?」

「あのね、僕は何も、作品を書くために入院するのではないの。あくまでも僕の暇つぶしの結果を、君が録音から起こしてくれただけだからね。今回もそうとはこきませんよ」

「まあ! センセ意地悪じやないですか」

「あは、そ such かな。実は海浜リゾート病院シリーズはなかなか好評で、良い飲み代になつていてるんで、なにかないかなと考えてはいるんだ、なにか良いテーマはない?」

「そうですね、前作の邪馬台国はどこにあつたかは、詩人らしい万葉集の知識もあつてユニークで、かなり評価が高かつたですね。・・・出版の立場から見ると、邪馬台国論争はどうやら一段落したように思えますので、古代でも何か違うテーマがないですか」

ドアがノックされ、看護婦長の草野英子がコーヒーを一つトレーに載せて入つてきた。

「山辺さん、お久しぶりです。二年前田沼先生が入院されていた時 いらいです。先生しばらくの入院になりそつなので、又なにかと よろしくお願ひいたします。なんだか、先生が体調を崩されたのが 嬉しいみたいで恐縮ですが、先生はこの病院の事をエッセイで別荘 と呼んでおられますから、病院全体が華やいだ気持になつて いるんですよ・・・あ、コーヒーを入れてきました、お好きでしたよね・・・先生はコーヒーと日本酒とウイスキーにはうるさい人なんですが、今はいくらなんでもお酒は当分だめなんで、特別に良い豆が手に入りましたので飲んでいただこうと、入れてきました」

## 詩人、テーマを決める

「あ、これはうまいこね」一口すすって、ベッドに腰掛けていた田沼は立っている婦長を見上げて言った。

「私ね、これと言つた取り柄はないんですけど、コーヒーだけは」つ  
ているんですよ。気にいつていただいてうれしいです」

「お世辞じゃないよ。ホントにうまい。なにか秘訣があるのか

「良い水を使います。私は丹沢の山に近い厚木に住んでいたので、山からのわき水が手に入るんです。その水で普通にドリップを入れますと、安い豆でも見違えるようなコーヒーが作れるんです。でも、今日は豆も一番高いの使ってみました」

「イスラム教では酒を飲んではいけないんだよ。それでアラブの坊さんは、酒代わりにコーヒー・コーヒーなんだ。僕もしばらくはコーヒーが酒がわりだな」

「パーheeならいつでもお申し付けください。すぐ用意しますからね。・・・ところで先生は、女子大で日本文学を教えていふと言ふことですけれど、日本書紀とか古事記なども教えておられるのですか」「5年まえからね、その大学教授が古くからの飲み友達でね、やつてみないかと声をかけられたんだよ。日本書紀とか古事記は、ちょっと自分には縁遠かつたんだがね、講師就任を機会に少し読み込んだよ」

「あら、そ、なんですか。私、歴史が好きで、閑だと『平家物語』とか、小説の「平将門」などを読む人なんです。・・・今、ひとつ疑問が私にはあるんです。それで先生に聞いてみようかなと思つたわけなんです。いいかしら?」

「解る」となら答えるが、

「日本書紀と古事記は似ているでしょ。聞くところによると同じ頃に作られたと言ひこどりらしいのですが、同じよつたものが、どうして二種類もあるのか私には解らないんですね」

「そうだね。それは気がつかなかつたな。それは変だね。不勉強で、その質問には答えられないな、ちょっと調べてみるよ」

横で聞いていた山辺沙也香の、眼が輝いた。そして言った。

「田沼先生、それいいですね。日本書紀と古事記には数々な謎があるんですね。その成立とか内容とか。どうです今度は「日本書紀の秘密」などというのは、いけるかも」

「ふむ、そうだね、日本書紀すら偽書ではないか、という人がいるからね。やつてみようか。以前に書いた「邪馬台国はどこにあつたか」でも日本書紀の記事を、しばしば検証したが『不思議な本だな』と、思ったことがあるからね。山辺さん、取りあえず古事記と日本書紀の原書と注釈本と現代語訳、それからパソコンを一台用意してくれるかな。あとは君の手伝いとパソコンで必要な本はおいおい手に入れることにしよう」、「うう」

## 古事記の序文

古事記、日本書紀が届けられて一週間後、昼過ぎ沙也香は田沼の病室にやつて来て言つた。

「先生、なにか収穫ありました？」

「そうだね、その前に、僕が我流で訳した古事記序文を読んでみてくれるかな」

沙也香は、さしだされた原稿用紙に書かれた古事記序文に眼を通した。

### 古事記序

臣の安麻呂は申し上げます。大昔、この世の根源が固まり始めても、いまだに定かな兆候を取ることがありませんでした。したがつて名もなく動きもありません。だれにもその形を判断できない状態であります。が、やがて天と地がはじめて分かたれて、神々の誕生となりました。神の陰陽も天地のように分かたれて二靈（イザナギの命・イザナミの命）は万物の祖先となりました。両神は陰の世界である幽界と陽の世界である現実との両方の世界を行き来して、太陽の神と月の神が眼を洗うにつけて現れ、海水に浮き沈みして身をあらうごとに多くの神々が現れました。この世の始めは暗くてはつきりしませんでしたが、神々の自らある智慧により国を生み、島を生み、再び神を生み、人を生んだことが解ります。天の岩屋戸に鏡を掛けた時から百の天皇が続き、剣でおろちを切つて萬神が誕生しましたのであります。神々が安川原やすのかわらで合議をなされ、それゆえ天下は穏やかになり、出雲の浜で大国主の神に談判してからは、国はいよいよ平穏となりました。この時をもつてニニギの命が初めて高千穂に下り、神武天皇が秋津島を巡歴なさりました。荒々しい神が熊に化けて現れるに及んで天から剣を得、尾のある人々が道に溢れて遮り

ましたが、大カラスが吉野への道を導きました。軍の者は舞い踊りながら敵を打ち合図の歌で賊を討ち取りました。崇神天皇は夢の中のお告げを聞いてオオモノヌシ神を祭られ、それ故に賢明な天皇と呼ばれました。仁德天皇は民家の煙の立ち上るのを眺めて、心安らかになられましたから、今でも、聖帝と呼ばれております。成務天皇は国や県の境を定められ、允恭天皇は遠飛鳥に飛鳥の都を建てて、天下の氏や姓を正されました。このように天皇それぞれの方が行つたことは様々でしたが、道を正すと言うことにおいて他ならないことがありました。

飛鳥清原に大宮殿を建造なさつて、全国をお治めになりました天武天皇の御世の前頃になりますとやがて天武天皇になられる皇子は天子たる徳を持ちながらも、いわれがあつてお隠れになつていましたが、ついに雷鳴を轟かせる時がやつて参りました。

けれども、天命がいまだ至らないので、蟬の抜け殻のように吉野の山に棲息なさりましたが、やがて時を得て伊勢の国に虎のようになされ、その軍は瞬く間に山川を越え渡り、軍勢はあたかも鳴りやまぬ雷鳴のごとく雄壯でありました。猛士は煙のよう燃え立ち、赤旗は、兵を引き立て、凶徒は屋根の瓦のように崩れ落ちました。そして短時日のうちに敵軍は壊滅し、戦場の悪臭も妖気も、自然と消え澄み渡りました。それで戦役に用いた牛を放ち、馬を休め、心安らかに都に帰り、戦旗を巻き、戈（なぎなたの様な長刀）を納め、天下泰平の歌を歌い都に入られました。時は正に太歲星（木星）が酉の方角にある年の二月、清原の大宮殿にて即位なされました。その道は中国賢帝五帝の一人黄帝にまさり、徳は周王を越えておりました。天皇はしるしとして三種の神器を受けて、その威光は国の隅々まで行き渡りました。しかも天皇は海のように深い智恵をもって、遙かな古代の事を探し求められ、明晰な御心は先代の天皇の業績を見据えておられます。

「ここに天皇が言われました。

「朕が聞くことには、『諸家が先祖から伝え持つている帝紀（天皇の系図）と本辞（出来事）は、すでに真実と違つて多くの虚偽を加えている』ということである。それであるから、今の時を以て、その誤りを正さなければ、何年も経ぬうちに、その真実が失われるであろう。史実の真実を定めることは、國家行政の根本である。それ故、国史を定め、後の世に伝えようと思つ」

時に、一人の舎人（官吏）がいました。姓は稗田、名は阿禮、年は二十八でした。人格は聰明で、書を読めば暗唱し、耳にはいる言葉は、すべて記憶しました。それで、阿禮に勅語して（命じて）天皇の系譜、出来事の数々を読み習わせました。しかしながら、諸々の事情が変遷し、いまだに史書をなすに至りませんでした。

臣がつつしんで思う事には、当代の元明天皇は天地人の三つの徳に通じておられ、その威光は宇宙の隅々まで行き渡り、御殿におられたままで、その徳は馬のひすめの先、舟の舳先まで及んでおります。太陽は天に燐々と輝き、慶雲は空を彩り、一本の幹が一本に合体し、一つの茎から多数の穂ができるといつ、吉兆が次々に現れて、これを書き留める書記官の手を休める閑すらもないありさまでございます。又、異国からの貢ぎ物はうず高くたまり、倉の中が空になると云う円は一月もありません。

ここに、天皇は旧辞の誤つてゐるのを惜しみ、和銅四年（註・西暦711年）九月十八日をもちて、臣安万侶に詔して、先の天皇が命じて稗田阿禮に音読させた旧辞を選録して献上せよとのことありますから臣はお言葉のままに仔細に採録いたしました。しかしながら上古の時は言葉は質朴でありまして文章化することはきわめて困難であります。漢字の意を持ちて表記すれば、阿禮の表現するところと異なり、かといって、阿禮の発する音のみを連ねては、はなはだ意が通りません。

それではありますから、一句の中に、音と訓をまじえて用い、単語などはまったく漢字の訓を用いて表記したものもあります。その上で意味の取れない言葉は、注を用いて明らかにし、意味のとれるものは、ことさらに注をつけませんでした。姓の読み方については、田下くわかという字を玖沙下と読み、帯の字を多羅斯たらしと読みますが、このよくなたぐいは、解ることでありますから、特に注をつけませんでした。古事記の内容は天地開闢かいびやくより始め推古天皇の御世にて終わります。それ故、神代から神武天皇までの神々の代を上巻とし、神武天皇より応神天皇までを中巻とし、仁德天皇より推古天皇までを下巻とし、あわせて三巻を採録して、慎んで献上いたします。臣安万侶、かしこみかしこみ、深々とひたすら頭をさげます。

八日 正五位上勲五等太朝臣安万侶

和銅五年正月二十

「どうかな、必ずしも原文とおりでないが、僕もヘボ詩人ながらいやしくも詩人であるからには、雰囲気は伝えているつもりなんだがな」と、田沼は、沙也香が読み終わつたようなので声をかけた。

「これならよく分かりますね。普通は現代語訳でも、よくわかりま

せんものね」

「古代の書物にしては珍しく、作者があつかましく出てきて、古事記の成立についてこと細かく説明しているね。天皇・皇子をさしおいて、正五位といつ、やつと宮殿に上がることができるといつぐらいのたいして位が上でない者が、このように官制の書物の巻頭に文を記載する事じたいが異常な事と思われるんだよ。ちなみに日本書紀編纂の責任者は皇子で第一位といつ高位の舎人親王（とねり）なんだ。その舎人親王ですら、日本書紀に序文など書いていないのにおかしいのではないか。まあ、日本書紀には序文とか後書きとかは一切ないのだがね・・・。これは今で言えば、大会社の社史に平社員が序章を書いているような違和感を感じるんだがどうだう？

「そういえば、そうですね」

病室の窓辺に秋の材木座の海が陽をうけて、きらきら輝いているのが見えていた。一人は無口になつて、その景色に見入つた。

「いつ見ても、良い眺めですね」

「どうだ、そこまでちょっと出てみないか」

「あら、いいんですか」

「なに、大丈夫さ。僕の入院は単なる肝臓君の骨休めだからね」

「ま、都合のいい入院です事」

「君ね、詩人を舐めてはいかんよ。普通、詩人は無法者で悪人なんだよ」

その時、ドアがノックされて、入つて来たのは海浜病院の院長、大島五郎であった。

「田沼先生ご挨拶おくれました。ちょっと糖尿病の研究会があつたもので、三日ばかり留守にしてました」

「いや、いいんですよ。ひどく体調が悪いわけではないんです。これは内緒ですが、ちょっと詩人仲間との酒のつきあいなどが煩わしくてね。それから逃げるために入院を院長にお願いしようと電話したら、おられなかつたのです。そしたら婦長さんがね快く受けてくれたんですよ」

「あはは、婦長は、裏で女院長などと呼ばれてるようですからね、私としては従つてている方が楽なのですよ。それで良いのです。・・・ところで、今度のテーマはもうおきまりなんですか?」

「ええ、古事記と日本書紀の関係がなんだか非常に怪しいのです。太安万侶がどのように関わっているかもなんだかはつきりしません。これをすつきりとさせたいのですが、どうなりますか。どうせ暇つぶしの座興ですから良いのですが・・・」

「また、これを元に出版なされるんでしょう。本に登場するというので近頃はこの病院の特別室はだいぶ人気が出てまいりました。また、普通の患者さんも面白がっているようなんですよ」

「おや、良い話しさ聞いたぞ。今回は病院から宣伝係として給料がでそうだな」

「いや、それはかんべんしてください」

院長が自室に引き揚げたあと、田沼と沙也香は浜辺の散歩に出かけた。

十月の日没は早い。西に海を見る材木座海岸は鎌倉のはずれで、人影が少なかつた。夕陽が雲と海を赤く染めている。田沼と沙也香は近くの、海辺のレストランに入り込んでコーヒーを注文した。

「たまには、こうして散歩でもして気晴ししないとね、良い発想も生まれてこないよ」

「この時間とてても良いですね。先生がここが好きなのがわかりますわ」

「そうだろう。僕は海が好きでね。君も知っているように、先年妻を亡くしてから、子供もない僕の生活は少し殺風景でね。海があつて暖かい人たちがいる海浜クリニックは居心地がいいんだよ。・・・朝に魚が水揚げされる小さな市場などは僕の詩興をかき立ててくれて最高なんだ。・・・さて個人的なことはこのくらいにして、これからの方を話そうか」

「あら、ちょっと、先生を寂しがらせてしまったようですね・・・ごめんあさい」

「僕はね、日本書紀と古事記の神話時代はわりとくわしいんだが、雄略天皇以降はちょっと苦手なんだな。私が講師をしている西鎌倉女子大学の国文科助教授に、まだ若い早川祐司君という人がいるんだけどね、先生にしては余り固くない人でね、いい加減な私と馬があうのだ。今日になつて、その彼ならば、私の調査のいい相談相手になつてくれると思いついたのだ」

「それなら、心強いですね」と、沙也香は言った。

## 古事記の不思議 二

レストランの「コーヒーは濃厚で純良だった。良く磨かれたガラス戸の外は広めのテラスになつていて。テラスの向こうの生け垣はサンカで濃い緑色の葉の所々に真紅の花がいくつも花を咲かせている。その向こうに、海が見えている。

田沼はコーヒーに砂糖を入れてから、静かにかき回して生クリーミ入れた。生クリームはコーヒーカップの中で、小さな渦となつた。それを田村はしばらくじつと見つめた後、沙也香に眼を移して言った。

「古事記が作成されたことは、日本書紀にもその後の史書である続日本紀にも書かれていないので。ところが、日本書紀が作成されたことは続日本紀にしつかり書かれているんだよ。古事記が作成された事情は、なんと、君がさつき読んだ、古事記の序文によつてのみ、知ることができるもの過ぎないんだ。もしだよ、この古事記の序文を、古事記からはずしてしまつと、古事記は成立不明の謎の書になつてしまふんだ。歴史の教科書には、古事記が成立した年代がしつかり訳知り顔にかかれているが、その知識の出所は、みなこの序文であつて、他の書物ではないのだ」

「そういうことなんですか？」

「そう」

「なんか不思議ですね」

「古事記の後の史書である同じ官撰の日本書紀に無視されている古事記はどういう書であるかと不思議だ」

「それでいて、古事記序には、くどい位の古事記成立のいわれが書かれているというのは、なんていいますか調和が取れていらない感じですね」

「そう、田辺さんの言つとおりだ。この変な序によつて、古事記は偽書であるという説まであるくらいなんだ。その説を裏打ちするか

のように、江戸時代に入るまで古事記の存在は忘れられていたといつのだ

「意外ですね」

「そうだろう」

「そして古事記が献上されたのが712年で、日本書紀が献上されたのが720年で、ほぼ同時に一種の歴史書が完成しているのも不可解なんだな」

「そうですね」

田沼はポケットから手帳を取り出して言つた。「ここに日本書紀が献上された事を続日本紀から書き写してある。ちょっとそれを読んでみよう。それはこうだよ。・・・先にこれ、一品舎人親王、天皇の命を受けて日本紀の編纂にあたつていたが、このたび完成し、紀三十巻と系図一巻を選上した。・・・これは続日本紀の養老四年の条、つまり720年の記事なんだ。ここで書つた日本紀といつのは日本書紀の本来の書名なんだ」

二人の会話が途絶えた。

## 古事記の巻頭文を詩人が訳す

翌日の午後、図らずもうわさをしていた早川祐司君がひょっこり、田沼の病室にやつて來た。

「田沼さん、またずる休みですか？」

ソファーで古事記と日本書紀の同じ神話のところを照らし合わせて、いた田沼は、その声に眼を上げると、笑顔の早川の顔が眼に入った。「オイオイ、死にそうな病人をとつつかまえて、その言い方はないんでないの?」と、田沼は怒った顔をしてみせる。もちろん、それは冗談である。

「やたらに休講にすると、そのうち学校も首になるかな」

「いやいや、田沼さんは講師でも、言つなれば、学校のスターですからね、これが私なら首が危ないですけど、田沼さんはべつですよ」「少しば、悪いなとは思つてはいるんだけど、調子が悪いことは悪いんだ。ま、今週には、病院を抜け出して学校に行くことはできると思つよ」

「田沼さん無理はしなくていいですよ」

「君に親切にされると、なんか気持がわるいな。優しくして、僕の講義を取ろうと、コンタクトだらつ」

「あはは、そうです!」

「そうだろうと思った。あはは。・・・いやあ、実は君に連絡を入れようと思つていたんだよ。また、リゾート海浜病院シリーズの新

作を書かされることになつちました。今度は少し手強いテーマでね、古事記・日本書紀の謎を解くということなんだ。ああ、そう言えれば、古事記・日本書紀は早川君が専門だつたなと思い出したんだよ」「まあ、国文科ですからね、知らないといつたら嘘になりますけど、ご期待にそえますかどうか。まあ、遊びに来るつもりで、伺いますよ」

「それは、ありがたい。頼むよ」

「いまね、古事記と日本書紀のイザナミ・イザナギの国生みのところを照らし合わせていたところなんだが、変な事に気がついたんだ」

「ああ、それならば推測がつきますよ。きっとあれですね」

「まあ、ちょっと僕の言うのを聞いてくれ。君には聞き飽きた話かも知れないが僕にはこの発見は新鮮なんだよ」

「そうですね。前から詩人の眼で記紀（古事記・日本書紀）をみるとどんなのかなという興味はありましたから、ここではおとなしく聞いていましょう」

「うむ、いい子だ。それじゃ、はじめるぞ」

田沼は、応接テーブルにおいてある、古事記岩波文庫・倉野憲司くらのけんじ 校注2003年版を手元に引き寄せた。

「まず、太安万侶の序文に続いて、古事記本文の巻頭は始まるね、今から読むのは、もちろん私なりの解釈でかみ碎いた文だ。まず、最初に倉野氏の解釈文を読んで、本の後ろの方に載っている漢字の原文とてらしあわせるのだ。すると、どんな高名な学者であつても、現代文に関しては小説家にも詩人には負ける文章であることがままである事だから、僕なりの現代語訳が出来上がるワケだ。もちろん意味不明の単語があれば古語辞典・漢和辞典などで調べてみる。そして、僕の現代語訳を文庫本の解釈文の横に、書いてしまうんだ。したがつて僕が読んだ本などは古本屋では一束三文で売り物にならない。それで僕はいつも貧乏で、チャーハンばかり自分で作つて食べるハメになるのだよ。アハハ。これはね若い頃、フランス語で書かれた詩集などの訳文の下に、僕の訳詩を書いたりしたくせのなごりなんだ。・・・あ、いけない、脇道にそれてしまった。これも君が悪いんだ、君といふとつい軽口がでてしまふからね」

祐司は、笑いをこらえて、田沼を見ている。

「ハイ、続けます。・・・天地が初めて発した時、たかまがはら 高天原に成れる神の名は天之御中主神。あめのみなかぬしのかみ 次に高御産巣日神。たかみむすひのかみ 次に神産巣日神。かみむすひのかみ 三柱の神は、連れ合いを持たない単独の神で、身を隠されてしまつた。この時、國土は幼くて、いまだ水に浮いた油のようであり、ク

ラゲのよう<sup>う</sup>に漂う時、葦の芽が勢いよく生えるように成れる神は宇摩志阿斯<sup>うましあしが</sup>詞備<sup>かひ</sup>比古<sup>ひこ</sup>遯神<sup>のかみ</sup>。次に天之常立<sup>あめのとじたちのかみ</sup>神。この一柱の神も、連れ合<sup>あわせ</sup>いを持たない単独の神でありまして身を隠されていました。上記の五神は高天原のなかでも特別の神でおられます。・・・どうだ?「良いですね、続けてください」

「次に成れる神の名は、國之常立神（國土の神）、次に豊雲野神。  
 この一柱の神も、連れ合いのない、独神の神で身を隠されていまし  
 た。次に成れる神は宇比地兩神、次に妹須比智邇神、次に角杙神次  
 に妹活杙神。次に意富斗能地神、次に妹大斗乃辨神。次に於母陀流  
 神次に妹阿夜詞志古泥神。次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神前記  
 の國之常立神から伊邪那美神以前を、あわせて神世七代と言います。  
 （上の一柱の独神は、各一代とし、次の男女十神は二神をあわせて  
 一代と数える）

「」に別格なる五柱の天つ神は伊邪那岐命、伊邪那美命一柱の神  
 に詔した。『この漂える國を固め修めよ』そして天の沼矛贈つて  
 委任なさつた。それゆえ一神は天の浮き橋（神が下界に降りるとき  
 に天空に浮いて架かる橋）に立つて、その沼矛を油のように漂う物  
 にさしisorしてかき混ぜました。、こおろ、こおろとかき混せて、  
 沼矛をひきあげる時、その矛の先からしたたり落ちる塩が重なり積  
 もつて島となつた。これが淤能碁呂島である。その島に二神は天下  
 りなさつて、りっぱな柱を選んで立て大変広い御殿を建てられまし  
 た。そうして伊邪那岐命は、伊邪那美命に問われました。『あなた  
 の身はどのようにでできていますか』答えられて『私の身はなりあが  
 りましたが、いまだなりあがらない所が一力所あります』それを聞  
 いて、伊邪那岐命はおっしゃりました。『我が身は成り上がつて成  
 りすぎた所が一力所あります。だから、この我が身の成りすぎた所  
 をもつて、あなたの身のなりきれない所に刺しふさいで、國土を生  
 もうと思う。どうであろうか』・・・やや、これは山辺さんみたい  
 なレディのいるところでは、恥ずかしくて声にできないきわどい話  
 しだね。今日は、來ていなくてよかつたなあ・・・と、田沼は早  
 川君の顔を見つめてにやりとした。

「さて、先を急ぐよ。・・・伊邪那美命は、それに答えて言った。  
『それでよいでしょう』と。伊邪那岐命は、その言葉を受けておつ  
しやりました。『それならば私とあなたは、この天の御柱を反対方  
向にまわって巡りあつたところで交わろうではないか』・・・これ  
も、あからさまな話だねえ・・・」

「」のように約束して、伊邪那岐命が『あなたは右に回り、私は左に回り、出会いましょう』と言つたあと、二人は柱を回り始めた。二人が出会い伊邪那美命が先に『あれまあ良い男だ事!』と言つた後、伊邪那岐命が『荒れまあ良い女だ事!』と言つた。

そのあと、伊邪那岐命がその妻に『女人人が先に声をかけるのは良くない』と言われた。寝屋で交わつて生んだ子は、人の血を吸うヒルのような骨なし子であつた。この子は葦の草で編んだ葦船に乗せて流し去らせました。次には淡島（不詳）を生みました。この子もまた、子としては扱いませんでした。こうした事で一柱の神は、相談して、口々に『今、私達が作った子はよい子ではなかつた。天つ神にお聞きしましょう』と言われた。それで共に天上に上がつて、天つ神にご意見を求めた。天つ神は太占（鹿の肩骨を桜の木の皮で焼いて吉凶を占う事）を行つておつしやられた。『女が先に言つたから良くないのだ。また帰り降りて、男が先に言うように改めなさい』と。帰り降りて、二柱はふたたび、天の御柱を回つた。伊邪那岐は言つた。『あれまあ良い女だ事!』伊邪那美は言つた。『あれまあ良い男だこと!』と。こうして二注が寝屋で交わつて産んだ子は淡路島であつた。次に四国島を産まれたが、この島は胴体が一つで顔が四つあつた。顔ごとに名前があり、伊予の国は愛媛と言い、讃岐の国は飯依比古と言い、阿波の国は大宣都比賣と言い、土佐の国を建依別と言つた。次に隠岐の三島を生んだ。この島の別名は天之忍許呂別と言つた。次に筑紫の島を産んだ。この島もまた、身一つで顔が四つあつた。筑紫の国（筑前・筑後）は白日別と言い、豊國（豊前・豊後）を豊日別と言い、肥国（肥前・肥後）を建日向日豊久士比泥別と言い、熊曾の国は建日別と言つた。次に壱岐島を産んだ。この島のまたの名を天比登都柱と言つた。次に対馬を産んだ。この島のまたの名を天之狭手依姫と言つた。次に大倭豊秋津島（本

州島）を産めた。この島のまたの名を天御虛空豊秋津根別あまつみそらとよあきづねわけとつた。これら八島を先に産んだ島なので大八島国とつた

ここまで読んできた田沼は言葉を止めて早川に眼を移した。

「この後、群小の島が産まれ、様々な神が産まれ、最後に火の神を産んで伊邪那美的の命は亡くなつて黄泉よみの国に言つてしまふ訳なのだが、今までの訳はどうかな？」

「解りやすくて良いですね。さすが詩人、酒ばっかり飲んでいるのではないと言つことがわかりますね」

「君にそう言つてもらえると安心するよ。しかし、その言葉には、ちょっと棘とげがあるね。・・・この、古事記卷頭の文を次に読む日本書紀卷頭の文と比べてみようと思つてゐるんだよ。そうすれば古事記と書紀の違いがいくらか分かると思うのだな」

翌日の夕方、沙也香が田沼に、構想の進み方等を聞いていたとき、ドアがノックされた。「どうぞ」と答えると、早川が入ってきた。早川は、室内に立っている沙也香にちょっと驚いた風であった。沙也香が和服であつたからである。今日、品川で沙也香の高校時代のクラスメートが結婚式を挙げたのだ。沙也香は、このところ田沼先生に「無沙汰であつたのと、日頃田沼から「君が和服を着たらキレイだうな」などと言われていたので、それでは先生の所に行こうと思いつ、夕方時ではあるが、やつて来ていた。

田沼は早川に声をかけた。

「おや、いらっしゃい。早川君、ここにおられる女史が、文化浪漫社の編集社員山辺沙也香さんだ。沙也香さん、彼がうわさの西鎌倉女子大学の助教授の早川祐司さんだ」

「うあ、祐司さんなんて田沼先生にいわれると、ゾクゾクとするなあ。・・・あ、初めてまして、先生御用達のきれいな出版社員がいると、先生から聞いていました。あなたですか、光榮です。よろしくお願ひいたします」

「先生はお世辞が上手なんですよ。がっかりなさったでしょ」「いえいえ」祐司は顔を横に振つてにっこり微笑んでみせた。沙也

香も微笑んだ。

「文化爛漫社の出版部におられるなら、歴史専門出版社ですから歴史にお詳しいんでしょうね」

「紺屋の白袴とよく言いますね、私もそのたぐいなんです。歴史はすきなんですけど歴史書をそんなに深く読み込んでいません」「そうですか、でも、歴史に少しでも詳しいなんて、良いですね」「つむ、若い者どうしで盛り上がりがつてゐるな。おじさんを置いてけぼりにしないで下さいね」

「あ、先生失礼しました。そこにいたんですか」と、祐司が混ぜつ

返した。

「はいはい、解りました。解りました。そろそろ、お勉強を始めましょうね、小生意気な生徒諸君」

「はーい」と一人の声が同時であつた。

「うむ、返事だけはよろしい。それでは、始めるぞ、質問などは後で頼むね」

田沼はすでにそこには置いてあつた応接セツトのテーブルの上に置いたPCプリントを取り上げた。

「ヒート、これも古事記と同じように、私が訳した物だ。ちなみに

日本書紀には古事記に太安万侶が書いているような序文などはない。

『日本書紀 卷第一 神代上』の題名のあとこう始まる。・・・

天地がいまだ別れず陰と陽も未だ別れない古い昔、混沌である」とはぐるぐる回る溶き卵のようでしたが、かすかにきざしのようなものがあるようありました。その中で澄んだ物が分かたれたなびいて天となり、重くにじったものは積もって大地となるに及んで、精妙な物質はつながりやすく、重く濁つた物質は固まりがつたかった。・・・あの、早川生徒君、沙也香さんの方ばかり横目で見てないで聞いてくださいね」

早川は顔を赤くして言った。「濡れ衣だ！聞いてますよ、田沼教授」沙也香は、そのやつとりが面白くてクスと笑つた。

「それゆえ、天がまず成立して、地はその後できあがつた。その結果、神はその中に、お生まれになつた。それで以下のような伝承が残された。この世の始めに大地の浮き漂うありさまは、たとえば泳ぎ回る魚が、水の上に浮かぶようである。そのようなときに天と地のあいだに一つの物が姿を現した。形は葦の芽のようである。それがすなわち神へと変化した。國常立尊と言つた。（極限に尊い方を尊といい、それに続く方を命と呼ぶ。以下はそのように記す）次に生まれたのは國狭槌尊、次に豊斟渟尊。以上三神が最初に天地を治められました。いまだ女性というものはなく、単独な性として男性がありました。

（始原の時については、多くの書が、様々に書いている。以下はその列記である）

一書が言つには天地が初めて別れるとき一つの物が無の中にありました。その形は表現しがたい物でした。そうした有様から神がお生まれになつたのです。國常立尊と名付けられた。または國底立尊とも言いました。次に生まれたのが國狭槌命または國狭立命と言つた。次に豊國主命または豊組野命と言つた。または豊齧野命または葉木國野命または見野命と言つた。

また他の一書が言つには、大昔国が幼く、大地が未熟だった時に例えれば浮かべた油のように漂つていた。その時に国の中に物が発生した。形は葦の新芽の育つに似ていた。これによつて生まれた神があつた。可美葦牙彦舅尊と言われた。次に國常立尊。次に國狭槌の尊。

また他の一書が言つことには天地が、いまだ混成している時に初めて神があらわれた。可美葦牙彦舅尊。次に國底立命。

また他の一書が言つには、大地が初めて別れるとき、それとともに

に発生した神があつた。くにのといたちのみこと國常立尊と言つた。次に國狭槌尊。また高天原におられる神の名を天御中主尊と言つ。次に高皇產靈尊。次にあめのみなかぬしのみこと神皇產靈尊」

「ここまで来て、田沼はプリントから顔をあげた。「どうだ、だいぶ飽きてきたのではないかね。この一書に言つは、まだまだ続くけど我慢して聞いて欲しい。これが、古事記と日本書紀のきわだつた違いだからね。書紀は原典の書名は伏せているが、諸家に伝わる書の内容を、一つ一つ記載しているのが解るね」

「また他の一書が言うには、天地が未だ固まらないときは、あたかも海の上に浮かぶ根のない雲のような有様であつた。その中に何ものかが産まれた。葦の芽が始めて泥の中から生え出す清らかさを持つものである。それが人の形になつた。國常立命<sup>くにのじたちのみこと</sup>と言つ。

また他の一書が言うには、天地が始めて別れた時には、あるものがあり、葦の芽のようで空の中に生まれた。これから出られた神は天常立尊<sup>あめのとこたちのみこと</sup>といつ。次に出られた方は可美葦牙彦舅尊<sup>うましあしかひこじのみこと</sup>といつ。また空の中にあるものがあり、浮かんだ油のようなようで、これから生まれた神を國常立尊<sup>くにのじたちのみこと</sup>といつ。

次に神が生まれた<sup>ういじにのみこと</sup>は、土<sup>う</sup>?尊<sup>じ</sup>?、沙土<sup>すいじ</sup>?尊<sup>じ</sup>?である。そのつぎに神が生まれた<sup>おおとのじよのみこと</sup>大戸之道尊<sup>おおとのみこと</sup>、大苦辺尊<sup>おおとまげのみこと</sup>。つぎにも神が生まれた。面足尊<sup>おもだつのみこと</sup>、煌<sup>か</sup>根尊<sup>こねのみこと</sup>である。次に神が生まれた。伊奘諾尊<sup>いざなぎのみこと</sup>、伊奘冉尊<sup>いざなみのみこと</sup>である。

一書が言うには、この一柱の神は青檼城根尊<sup>あおかしきしねのみこと</sup>の子である。また、他の一書が言うには、國常立尊<sup>くにのじたちのみこと</sup>が天鏡尊<sup>あまかがみのみこと</sup>を生んだ。天鏡尊<sup>あまかがみのみこと</sup>が天万尊<sup>あめのよろずのみこと</sup>を生んだ。天万尊<sup>あわなぎのみこと</sup>が沫湯尊<sup>あわなぎのみこと</sup>を生んだ。沫湯尊<sup>あわなぎのみこと</sup>が伊奘諾尊<sup>いざなぎのみこと</sup>を生んだ。

正統な伝承によれば（上記一書がいつには、・・・。の前の文）、まとめるにハ柱の神がおいでになつた。陰陽の気が混じり合い、この神々は男女の両性を持つておられた。國常立尊から伊奘諾尊・伊奘冉尊に至るまでを神世七代といつ

田沼は、プリントから再び目をあげた。そして一人を見た。そして言った。

「一書云々の前には、いわば日本書紀の公式見解が書かれていて、

そのあとに、異説として多くの書からの文が転載されているという  
のが解るね。だから、書紀は公式見解を強引に押しつけている訳で  
はないのだ。こんな記録があるよと、わりとフェアな姿勢なのだね。  
しかし、引用する書籍の名を「一書」と書いて伏せている姿勢には  
フェアでない姿勢が見えるのだ。これには何か理由があるに違いな  
いと思うのだよ。さていよいよ次はお待ちかねイザナギ・イザナミ  
の話だよ。古事記とどう違うかに注意して聞いて欲しいね  
田沼はプリントに皿を落として再び読み始めた。

「伊奘諾尊・伊奘冉尊は天と地に架かる橋に立たれ、話しあわれ『この底の下に、國があるはずである』と言われた。そして玉で飾つた矛をさしあるして探ると、そこに青海原が現れた。その矛の先から滴る潮が固まって一つの嶋となつたのだ。それを？馭慮嶋と名付けた。ここに、一柱の神はその島に降りられて、夫婦の行為をなされた。州と國を生もうとした。？馭慮嶋を國の中心の柱として陽神は左に回り、陰神は右に回つた。國の柱をめぐつて、二神は顔を会わした。

その時、陰神がまず声を出して言つた。『ああ嬉しい。なんと良い男に出会つたのだろう』陽神は、これを喜ばずに言つた。『私は男である。理では、最初に声をかけるべきであるのに、どうしてかえつて婦人が声をかけるのであるか。よろしくないことになつた。改めて柱の周りを回るべきである』と。

そうして、二神はさらに再び柱の周りを回り、巡り会つた。今度は、陽神がまず声を出して言つた。

『ああ嬉しい。なんと良い乙女に会えたのだろう』そしてさらに言葉を重ねて陰神に聞いた。『今、あなたの身に何かできあがつているところがありますか』答えて言つた『私の身には一つの雌のはじまりという所があります』陽神が言つた。『私の身にも、また雄の始めというところがあります。私の身の雄の始めという所を以てあなたのが始めのところに合わせようと思つ』

一に陰陽を始めて、あい合わせて夫婦となつた。

子を産むときになつて、まず淡路島をもつて、身内とされた。二神には、この子は意にそぐわないところがあつた。それゆえ、吾恥という意味を持つ、淡路島と呼んだ。そして大日本豊秋津州を生んだ。次に伊予の二名島（四国）を、生んだ。次に筑紫の島を生んだ。

次に隱岐の島と佐渡の島を双子として生んだ。次に越の島（北陸）を生んだ。次に大州おおしま（不詳）を生んだ。次に吉備子州きびのこじま（吉備の児島半島）を生んだ。以上の誕生をもつて、大八州おおやしまの名ができた。対馬、壱岐の島、諸所の小島はみな潮の泡が固まって出来たという

田沼はプリントから田をあげ、言葉を切つて、二人を交互に見つめた。そして言った。

「さて、ここまでが日本書紀の国生みの本論で、次に読むのが、諸家に伝わる『一書に言ひ』といつ名論なんだ」

「一書に言つには、天神は伊奘諸尊・伊奘冉尊に、豊葦原の千五百秋の瑞穂の地みすほというのあめのねほがある。あなたが行つて治めるべきである」と言われ、天瓊矛あめのうきはを下さつた。

そこで一柱の神は天上浮橋あめのうきはに立つて、矛をさしおろして大地を求めた。青海原をかき回して引き揚げるときに、矛の先から滴り落ちる潮が固まつて島となつた。これを名付けて、馭慮嶋おのじゆしまと言つた。

一神はこの島に降りたつて広大な御殿を建てられた。また天を支える主柱も建てられた。陽神は陰神に問われた『あなたの身に何かできあがつたものがありますか』答えていには『私の身はできあがつて、陰のはじめと言つものがひととこあります』

陽神は言つた。『私の身にもまた、できあがつて、陽のはじめといつものがひととこあります。私の陽あのはじめをもつて、あなたの陰めのはじめに合わせようと思つ。あなたは柱を左に回りなさい。私は右にまわりましょう』

別れて回り出合つたときに陰神がまず声を上げた。

『ああなんて、いい男ひいだこと』ついに交わつて最初に蛭子ひるこを生んだ。それで、葦あしの舟に乗せて流してしまいました。次に淡島あわしまを生みました。この子は子供の数には入れませんでした。

そのため天に戻つて、こと細かくその有様を申し上げました。これを聞いた天神は鹿の肩骨を焼いて占ひいを行い、言われた。

『女性が最初に声をかけたからなのです。もう一度もどりなさい』そうして、帰還に良い時をも占つて戻された。

一神は、また改めて柱を回られた。陽神は左に周り女神めがみは右に回つた。二神が再びであつた時に陽神は言われた『ああ、良い娘だ』陰神は後に答えて言つた。『ああ良い男だ』

そうしたのちに、同じ宮に住み子を生んだ。大日本豊秋津島と名付けた。次に淡路島。次に伊予いよ一名島ふたなのしま（四国）。次に筑紫島。次に

隱岐の三子の島。次に佐渡島。次に越の島（能登半島。島であったという説がある）。次に吉備子島（岡山県の児島半島。これもかつては島であったのである）。これによつて全てを大八州国と名付けた。

また他の一書に言ひ。一神は天霧あまぎの中に立つて、『私は國を得よう』と言われた。そして天瓊矛あめののぼりを、さしあるして探られると？馭慮島じまを得た。それで矛を抜き揚げて喜んで言つた『良かつた。國があつた』

また他の一書に言ひ。一神は高天原たかまがはらにおられて言われた。『國にそあれ』と。そして矛をもつてかき混ぜて作つた。

また他の一書に言ひ。一神が語り合つて言われるには

『なにかあぶらのよくな物が浮かんでいる。あの中には國かみがあるだろう』と言つて、玉飾りの矛をもつて海をかき混ぜて島を作つた。

また、他の一書が言ひ。陰神が先に言われた。

『ああうれしい。良い男だこと』と。この時に、陰神の言葉が先になつたことを、礼節に叶わないと、もう一度、柱の周りを回つた。そして、陽神が『ああうれしい、良い娘だこと』そうして遂に交合しようとしたが、その方法を知らなかつた。その時セキレイが飛んできてしまりに腰を振つた。一神はそれを見て、交わる方法を知つた。』

田沼は再び、プリントから田をあげて、沙也香にちらりと視線を当てた。沙也香は恥ずかしがるとと黙つより、あきれた顔をしていた。田沼は言つた。

「どうだい。このあつけらかんとした描寫は。まことに以て、これではセクハラみたいになつてしまつが、仕事のためだ我慢して下さ

い。ああ喉が渴いた」

田沼は缶ビール二本とノンアルコールビールを冷蔵庫から出して、二人にビール、自分のためにはノンアルコールを配つて。栓を開けた。

「一書の言ひには・・・は、一見、同じ文の繰り返しに見えるが、少しずつ内容や言葉使いが変わっているんだ。ちょっと退屈になつてきたと思うけど、わりと原文に忠実に訳しているから、生徒諸君はがまんしてその違いに気をつけながら聞くよつ」。もう少しだから我慢我慢。オホン」

詩人はさらにプリントを読み続けた。

「他の一書に言ひには、一柱の神は夫婦の交わりをして、まず淡路島をもつて、身内とし、大日本豊秋津島を生んだ。次に伊予の島。次に筑紫の島。次に隱岐の島と佐渡の島のふたご。次に越の島。次に大島。次に子島」

「他の一書に言ひには、まず淡路島を生む。次に大日本豊秋津島。次に伊予の一名島。次に隱岐の島。次に佐渡の島。次に筑紫の島。次に壱岐の島。次に対馬」

「・・・さて、あと三条ほど、一書によればが、続くのだが、あとはまあほとんど同じ文であるから、ここは、はしょつてしまおう・・・以上で、いささか退屈な講議は終わりだ・・・やれやれ。これを訳すのはかなり嫌になつたよ」

沙也香は言った。「ご苦労様です。大変で病氣悪くなりそうじゃありませんか。・・・私、今まで日本書紀に田を通した事がなかつたんですけど、古事記がシンプルであるのに比べて、ぐどいぐらいい多くの書から引用しているのが、印象的ですね」

その言葉を早川が受けて答えた「そうそう、だれでも、日本書紀がそのような書き方をしていることに最初驚くんだよ。ここでの他書の引用は十書なんだ。田沼さんの訳文を聞いていると、十書を引用するまえに、書記は書記の公式文とも言ひべき文を提示している

のが解ると思う。だから単純に読もうとするならば、一書の引用を読まなければいいのだ、なんて乱暴な事もいえるのです。また、反対に公式文を読まずに、一書に言つの中の、気に入った条を繋いで行けば別の物語を読めるという多重人格みたいな所を日本書紀はもつてゐる不思議な書なんだ」

田沼は、それを受けた。「そうか、だから、読むのが嫌になつてしまふ様な印象があるのか。難しいのでなくて、複雑な構造をしていて、理解しにくいことだね」

「そうなんです。書記は各論をそのまま読む人になげだしてくるのです」

沙也香が言つた。「私、古事記は前に読んだ事があるんですけど、日本書紀の内容を知るのは今度が始めてなんです。きっと同じ記事なんだろうなと思っていましたけど、随分違うと言つことが解りました」

## たつた三人の研究会

田沼はグラスに入れたノンアルコールビールを「ぐく」と、うますうに飲んだ。そして言った。

「さて、これから先は研究会だ。今までの部分に三人で検討を加えようという算段だ」

「え、今日はこれでお開きではないんですか」と祐司は声を上げた。「僕が、大病ながら、夜寝る間も惜しんで記紀の訳を書いたのは、君たちの為なんだぞ。独身どうしでどこかの洒落たレストランに行こうなどという良からぬ考えは許さないぞ」

「え？ 独身！」若い一人は顔を見あわせて異口同音に声を上げた。

「そうさ、君たちは三十代で独身どうしだ、もう60才に手がとどきそうな、鬼の様なかみさんを持つ僕にはうらやましくてならんね。・・・まあ検討会にあまり時間をかけないから、後は好きにやりなさい」

と田沼は言って、一人の顔を交互に見た後、意味ありげに微笑んだ。

「さて、それでは検討会を開始しよう。この中で、どちらかというと、一番記紀（注・古事記と日本書紀をまとめている言葉）について知識がないのは沙也香君かな、その沙也香君から感想を聞いてみたい。そう、中途半端に知っているより、わりと真実を見つけることができそうだからだ。じゃ、沙也香君どうぞ」

「そうですね・・・さつき言った、いろんな、今は失われた書から文を引用しているということですね。研究者にとつては今はいい書名は伏せられているのが残念というところです。それから引用された、文に登場する神様がおおむね同じでも、微妙に異なっていて、そのおたがいの関係とか偉さも違つよつですね。それから記紀が正説している、主文の出所が不明です」

「そうか。じゃ、次に祐司君だ」

「エート、そうですね・・・古事記の太安万侶の書く、序文がなんだか余りにも生々しいという感じですね。古事記が作成される来歴が、細部にわたって書かれすぎていて、まるで、この文だけが、古代から抜け出してきて、直接私達に話しかけているように感じます。本文に関しては書紀より古いはずなのにかえつて明晰で書紀より新しい感じがします。しかし、いざなみ、いざなぎの神の国生みの記事は、小学生には読ませられないような露骨な描写ですね。これが、この文章の古さを表しているのかなあとも考えられます。・・・それから「オロコオロ」とかき混ぜるという古事記の表現は、なんだか古代の牧歌さが感じられます。古事記には偽書説があるんです。古事記の後に作成された日本書紀や続日本紀に、古事記に関する記事が一切ないのですね。古事記に関する史料は、全て古事記の太安万侶の序文から出ているだけなのです。その制作の過程も、成立年号も執筆者も稗田の阿礼も、古事記についての一切の資料は古事記序文によりしかないのです。だから太安万侶の存在も疑われたんですね。が、これについては太安万侶が何者かを記さないでですが、位階を受けた記事が日本書紀に記されているので、存在した人であることには間違いないのですが、ただそれだけの記事なのです。ところで最近、太安万侶の墓と没年を示す墓碑が発見されて話題になりました。太安万侶が存在した事は間違いない事実なのです。一部には、これをもつて古事記真書の裏付けとする人がいますが、論理的に考えれば、古事記序文に記されている年号と太安万侶の没年が整合するという事だけしか判明しないのです。一方。日本書紀に関しては続日本紀に編纂される課程がしつかり記載されています。それとまた、記載の内容の分量の違いですね。ここにちょうど岩波文庫の日本書紀がありますが、現代文になおして日本書紀は1500ページ、古事記は200ページという差があります。このうち古事記に関しては、その最後の20ページが雄略天皇の後の代々の天皇の簡略な記事で推古天皇で終わっているのです。この分量の違

いは、神代紀の簡略さと、天皇代の記事の少なさから来ているのですね。まあ、神代紀は少ないと言うより、日本書紀にある、一書引用の羅列がないということもあるのですがね・・・

「うん、ありがとう。僕の意見はまた、後の日ということにしてよう。海岸もすっかり夕陽になってしまったようだよ。水銀灯も紫色に点灯はじめているよ。そうだこの先の海岸にドイツのおばさんがやつてているハンバーグレストランがあるよ、そのハンバーグや自家製ワインナソーセージや酢キヤベツやドイツビールはなかなかのものだよ。君たちには、いささかお節介かもしれないが、その店に予約を入れておいたよ。コース料理は僕のおごりだ。酒は自分で払いなさい。君たちはヤマタノオロチみたいに大酒飲みだからね、そこまではめんどう見切れないね。なにせ、詩があまり売れない、エッセイが収入の主な僕だからね」

十一月の半ばになった。何となく年の暮れの気配が、祐司の大学にも、沙也香の出版社にもただよつて、一日ぐらいなら閑がとれて、また病室に毎過ぎ三人が集まつた。

「あれから、どうしたなんて、野暮な事は聞かないよ。・・・・・で、どうだつたの・・・」

「あはは、聞いてるじゃないですか。御飯を食べて、カラオケやつて別れました。ね、沙也香さん」

沙也香は、「メ」という顔で、田沼を可愛らしくにらめつけた。

「オホン・・・さて、研究会開始！・・・」の前の記紀についての感想からすると、君たちが見落とした重大な事がある

「え、それはなんですか」と祐司は声をあげた。

「古事記ではイザナギとイザナミが生んだ島・地域の順番が淡路島・四国・隱岐の三島・筑紫（筑前、筑後地域）・豊国（豊前、豊後）・肥の国（肥前・肥後）・熊蘇の国（熊本南部、鹿児島）・壱岐島・対馬・佐渡・大倭豊秋津島（大和を中心とした畿内）で、ここまでを最初に生んで大八島国であるとしている。さらに吉備の児島（岡山県児島半島）・小豆島・大島（山口県の大島か）・女島（大分県国東半島の東北の姫島か）・五島列島・両児島（長崎県男女群島）だ」老眼鏡をかけ、目をプリントに落として読んでいた田沼が目をあげた。田沼のめがねは遠近両用だから、めがねを下げて、視線を送つてくるような事はなかつた。

高そうな金縁のめがねである。

「「」の順番が問題だね。最初に生まれた島々または地域の一群を大八島国と読んでいるね。この呼び名は、自らを大和国と言つ前の古い国名と思つたが、なんとこの一群で最後に生まれるのが、近畿

地方の古名であると言わわれている大倭豊秋津島なんだ。この順番が日本書紀では、本文においても。引用する一書でも、最初に生まれるのが大倭秋津島おおやまとあきつしまだ。そして最後に生まれるのが、古事記にはない越の国（富山、新潟）だ。この表記には明らかにある秘密が隠されていると僕は思う。日本書紀編纂時に、古事記のようであった誕生の順番が入れ替えられ追記されたと僕は考えるのだ。古事記が、太安万侶の序文によらなくては日本書紀よりずっと古い文章である証拠を、僕は古事記の文から読み取つたんだ。それはね、日本書紀にある越の国が、古事記にはないと言つことだ。越の国は八世紀頃になつてやつと倭人のエリアに入つってきた、アイヌの領地だから、古事記が古い歴史書であるなら、古事記に越の国の誕生の記事がないのは当然だ。・・・太安万侶の序文では、日本書紀に先立つ十年前に完成した事を示す、年号が書いてあるのだけれど、実際には古事記の成立は日本書紀成立より相当前であつたと思われるね。・・・僕の考えでは50年ぐらいは充分に古いと、思う。だから古事記は最初はは文字でなく稗田阿礼のような者による口承による伝承の歴史だったのではないか。・・・ところで日本書紀が、ここでは、地域の生まれた順番を書くことを控えているように見えるのも怪しさをつのらせるね。一書を羅列するけど、国生みの順番をかいているのは、本文と次に引用する一書のみなのだ

「よく分からぬかな？もう少し詳しく説明しよう。古事記の序文によれば、古事記は和銅五年（712年）に天皇に献上されたとある。日本書記については「続日本紀」の養老四年（720年）五月の条に『以前から、一品位の舍人親王は天皇の命を受け、日本紀の編纂にあたつていたが、このほど完成を見て、紀三十卷系図一巻を献上した』とある。だから、一書の記事が正しいとすると、古事記が出来てから八年後に日本書紀が出来たということだ。歴史の長いスパンから見れば、八年という成立の差はないに等しいと言える。それであるのに日本書紀には越の国が生まれた記事があり、古事記にはない。これはどういうことだろうか。・・つまり、その理由はこうだと思う。日本書紀が書かれた時には『越の国』は天皇家の支配の領域に入っていたが、古事記が書かれた時には『越の国』は、まだ支配する領域に入つていなかつたと言うことなのだろうと。それがたつた八年の差であるはずがない。古事記が出来てから日本書紀ができるまでには相当の長い年月があるはずだ」

「太安万侶は古事記はもとより、日本書紀の編纂にも関わっていたと、聞いていますが、どうしてこうした記事の矛盾を放置したのですかね？」と祐司は言った。

「そう、それだよ。太安万侶は日本書紀の時代の人だ。もし古事記が書紀より50年前に作られたと仮定すると、太安万侶が古事記を編纂出来るわけがない。つまり、太安万侶は古事記の製作に関与していないのだ。またたとえ古事記製作に関与していたら、越の国が生まれたことを落とすわけがないじゃないか」

「え！太安万侶は古事記の作者じゃないというのですか」と、沙也香が声を上げた。

「そもそも、断じて、古事記の作者ではない。古事記本文に、太安

万侶と言つ名を使って誰かが序を書いたのだよ。それに、この説を補強する発見がまだあると言つことを次に話そう。古事記の文のなかにはね、いわばビッグバンの背景放射のよう、大和朝廷以前を示す、はるかなる声がちりばめられているのだよ。

「

「宇宙がビッグバンのなごりを360度の方向から背景放射として、かすかなノイズをいまだに送つてよこしているのに似て、古事記はその創作の古さを、書中にしのばせているように愚鈍の僕にさえ感じられるんだ。その一が、国生みに『越の国』の記事がないことだ。その一が、国生みが『淡路島・四国』で始まり、『筑紫』諸国をしつかり生んだ後、一番最後に『近畿』を生むことであり、その三が、別<sup>わけ</sup>という、地名の存在があることであり、その四が、国生みの際のスマートでない露骨なあけらかんとした性描写だ。その五が、久羅下那洲多陀用弊流<sup>くらげなすただよる</sup>といつた表記をして、現在なら『海<sup>うみ</sup>月<sup>つき</sup>なす漂<sup>うき</sup>へる』とかくべき表記をいまだ持たないことである。古事記にあつて書記にないものは、めだつものに關してはこの五つだけ、子細にみれば、きっとまだ何かがあるに違ひないけれど、いまはこの五つの証拠の検証で済ませうと思つ。

その一についてはすでに話した通りなんだが、その二の、国生みが淡路島、四国で始まる話は、日本書紀では、引用する『一書』においても、すべて大倭豊秋津洲<sup>おおやまとよあきつしま</sup>（大和地域）から始まる話となつてゐるが、これは、書紀編纂時に『一書』の国生みの順番を改竄した可能性が高いと思うのだ。これは古事記においては、近畿地域はさして重要な地域ではないが、日本書紀にとつては、当然のことながら重要な地域であることを示している。これは国生みの順番が古事記の通りであるのならば、この列島は、大和朝廷が興る前に、淡路島・四国において、最初の王朝の興隆を見ているはずであるという推測を喚起させつるね。古事記は、このように大和王朝以前の諸王国の時代を記録しているとは言えないだらうか。たとえば『吉備王朝』とかね・・・。古事記といつ歴史書の巻頭の部分は、大和王朝のものでなく、いづれかの『吉備』や『筑紫』の古王朝の歴史書

であつた可能性はないだろうかな・・・」

田沼はそう言いながら祐司に質問するような視線をおくつた。祐司は古事記と日本書紀の国生みの部分を開いて見比べながら言った。「気がつきませんでした。そうですね、たしかに順番がちがいますね。これは良い着眼点ですね。古事記が日本書紀よりも編纂年次が早いのなら、古事記には国生み神話の古形が残されているという事でしょうね。一説に言われる、古事記が、日本書紀の要約本であるというのなら、近畿が国生みの最後にされて、越の国が表記されない理由が見あたりませんね」

「まったくその通りだね。それはすゞく良い視点だ。・・・さて、次に、その三別についての考察だ。古事記の国生みにさいして、不思議な地名が出てきたのを覚えているかい。抜粋すると、『土佐の国は建依別<sup>たけとうりわけ</sup>』の國は<sup>あめのおじこるわけ</sup>天之忍<sup>あめのおじこるわけ</sup>許呂別<sup>よきわけ</sup>。次に筑紫の島を生んだ。この島もまた、身体が一つで顔が四つあった。顔ごとに名前があり、筑紫の国は白日別<sup>しらひわけ</sup>といい、豊の国は豊日別<sup>とよひわけ</sup>といい、肥の国は建日向日<sup>たけひむかいひとよくじひねわけ</sup>豊久士比泥別<sup>とよくじひねわけ</sup>といい、熊曾国は建日別<sup>たけひわけ</sup>といつ。（中略）次に大倭<sup>おおやまと</sup>豊秋津島<sup>とよあきつしま</sup>を生んだ。またの名を天御虛空<sup>あまづみ</sup>豊秋常別<sup>とよあきつねわけ</sup>と云つた』この別<sup>わけ</sup>という地名は、日本書紀ではきれいに消去されてしまつてゐる。この地名は一体何なんだろうか。僕が思うに、ひょっとしたら、大和支配以前の古い地名ではなかろうかと思うのだよ。北海道に別<sup>べつ</sup>という地名がおおいけど、古事記の別<sup>わけ</sup>と密接な関係があるように思えるのだ。僕が調べたかぎりでは、この別<sup>わけ</sup>と別の関連について言及した書はないようだから、全く自分かつてな考察なんだけど・・・日本書紀が、この別<sup>べつ</sup>という地名を削除しているのは、この地名は古事記が偽造したものだつたからだろうか？それとも、古事記の記事を知らなかつたからであるつか？たぶん知つていただろうけど、おそらく、このことは、日本書紀の建前、つまり大和王朝成立の前に全国制覇の王朝は存在しなかつたという事を突き崩しかねない、古王朝の地名だつたからではなかろうか。この場合、古王朝とはなんだろうか？アイヌの人々がつくる数多くの群小の村々ではなかつたろうか。・・・こんな、メチャクチヤな事をいふのは、根拠があるのだ。アイヌ語では川の事を『ペチ』といつたそうで、川の流域を単位として地名とするのがアイヌの文化のなごりなんだが、それにのちの人々が『別』という漢字をあてたわけだ。岩尾別、浜頓別、登別、幌別、芦別、江別、喜茂別、当別、秩父別、遠別、初山別、愛別、湧別、紋別、

稜別・・・北海道の地名を搜せば、いくらでも別の地名があるが、この地名は少なくとも平安時代以前から使われていた地名だと思われる。・・・その地名が九州や近畿にもあつたと云うことを、古事記の別の地名はしめしてはいないだろうか、それゆえ、日本書紀は、前支配者の残滓を抹消したという事なのかな」

## 御成通りの立ち飲みバー

「次は第四の、古事記と日本書紀の性描写について検討したい所なんだけど、これは次の機会に検討しようか、沙也香さんを田の前においてあからさまで、いくらなんでも失礼だからね、後の日、おばさんになつた沙也香さんから訴えられないとも限らないからね・・・」と田沼は沙也香をみて、いたずらっぽく笑つた。

「だから、今日のところはこれで、おしまいとしよう。次回は祐司君と僕だけの密会とするよ、沙也香さん。」

沙也香は口をどがらせて、不満そうな顔をしているが、内心は、祐司の前でそのようなあからさまな話にさらされたくはなかつた。こつしたところが、田沼の優しいところで、詩人らしいデリケートな思いやりは沙也香の尊敬する所だつた。それで、その不満顔もすぐ笑顔に戻つた。

「そうですね。ヒビヒビの餌食になりたくないですもの。どうせ録音は残るのですから、後で聞かせていただきます。でも、お上品にお願いします」

「アハ、上品なわけがないだろ。詩壇では、こうみえても女好きの評判を頂いているんだよ」

「そんなこと、知っています。会社の編集部長が田沼先生の毒牙にかかるなよと、いつも云われてますから」

「あ、ひどい言い方だな。もう僕は君の会社の仕事は降りる。部長に伝えて欲しいね。・・・アハハ」

先ほどまで、羊雲が赤く染まつて、暗くなつてきた海の上に広がつてゐるのが見えたが、今はその赤い色もあせて、グレーの雲となつていた。

祐司と沙也香は灰色の羊雲の広がる海岸を歩いた。

「先生商売はね、のんきそうですが、結構、人間関係に気を遣わなければならぬんですよ。教授の娘さんを妻に迎えろと、まわりはとかくうるさいのですが、僕は女性に興味のないふりをして、切り抜けているのです。大学の研究室というものは、とかく能力でなく、閨闥でつながつてゐるような所がありましてね、これから自分などはどうなることやら」

「ちょっと見たところ、良い仕事にみえますけど、いろいろあるんですね」

「そう、だから、思うんです、田沼先生みたいな文筆業になりたいなど・・・ところで、僕、行きつけのお店があるんですが、いつてみますか。全然豪華な店ではないんですよ。立ち飲みですから。しかし良いお酒があります。沙也香さんだったら気に入つて貰えそうですね」

「鎌倉で立ち飲みですか？」

「鎌倉駅の西口の御成通りに高崎屋という老舗の酒屋さんがあるんですけど、裏で立ち飲みをやつてゐるんですよ。そこに集まる人がなかなか面白くて、人生の風雪を耐えてきたという人が多いんです。行ってみません？」

「一度覗いてみようかしら、立ち飲みは行つた事がないんですよ」「助教授の前は、単に研究員だったから、その立ち飲みには随分お世話になつたんだ。ものすごい薄給だったからね。お新香が奥さんの自家製で美味しいでね。」

これに鎌倉お屋敷御用達の純米酒が一合550円だから、随分楽しませてもらつたものさ」

御成通りは、鎌倉駅と大仏を繋げる、駅前の道筋にある。従来は、観光から取り残された、さびれた地元商店街であつたが、ここ十年來、観光地を歩こうという人々が増えて、そうした人々が、この商店街を活性化させつつあるのだろう。年ごとに町並みは美しくなつてきている。高崎屋は、この商店街の中核として、銘酒を扱い、

重さを為してこらのだ。

## 田沼と祐司、一人だけの密談

助教授の祐司は、大学が冬休みに入ってしまったので、雑務から逃れて、田沼の所に来やすくなつた。朝の鎌倉材木座の海は青く澄んで、雪化粧した富士山も相模湾と江の島の上に遠望できた。

昨夜、沙也香と高崎屋で楽しく飲んだ後、御成通りが駅前の江ノ電駅につながるあたりのお好み焼き屋「津久井」でお好み焼きと太麺の焼きそばを食べて沙也香を駅前まで送つた。駅の改札口で祐司は沙也香を送りながら、沙也香を好きになりかけている自分に気がついた。沙也香さんは僕の事をどう思つているのだろうか・・・そんなん、高校生のようなほのかな気持は久しぶりであった。

「よう、来ているな」と不在だつた田沼が帰つてきたのは、祐司が窓越しに、海やトンビを眺めているときだつた。「ああ、田沼さん、まだどこか喫茶店でも行つてしまつたのかと思つていたんですよ」

「いや、タバコは控えている僕だけど、たまにはパイプで香り高い草をくゆらせたくなつてね、海の見える庭で一服やつていたのさ」田沼は手に持つた、白い石で作られたパイプを応接セツトのテーブルの上にコトリと置いた。祐司は、それが、小説などに良く出てくる海泡石かいほうせきという石で彫られた高級パイプだなと思つた。

パイプと詩人といえば、あの放浪で有名な詩人ランボーもコーンの軸で作つた、ポパイのようなパイプをくわえていたつけなともチラリと思つた。

「それでは男同士の内緒話をはじめるか」と、田沼はいたずらっこのように笑つた。そして、ベッド横に積み上げている本の中から古事記と日本書紀・第一巻を持ってきて、祐司の前に座つた。

「古事記の、イザナギとイザナミの出会いと国生みの条を読んで、

それから日本書紀の、同じ内容の条を読んで、その表記の違いを明らかにしようと思う。・・・まず、古事記だ。・・・イザナミギ命は、イザナミの命に、『あなたのからだはどのように出来上がっていますか』と問うと、『わたしのからだは出来上がつて出来上がりきれないところが一力所あります』と答えた。そこで、いざなぎの命は言った『私のからだは、出来上がつて出来すぎた所が一力所あります。だから、この私の出来過ぎたところで、あなたのからだの出来上がりきれない所に刺しふさいで、国土を生もうと思う。どうであろうか』と。イザナミ命はこれに答えて『よろしくうございます』と言った。イザナギの命は、その言葉を受けて『それでは、私とあなたは、この天の御柱を回つて会つて、その所で交接しましょう』と言つた。そうして次のように約束した。『あなたは右回りしない。私は左回りをします』と。約束を終えて回つたとき、イザナミ命が先に『ああなんて、いい男!』と言い、次にイザナギ命が『ああなんて、いい女!』と言つた。おのれの言い終えたあと、その妻に『女人人が先に言うのは良くない』と言つた。しかし、そのまま交接に移つて生んだ子は骨のない蛭のような子であった。この子は葦船に乗せて流し去らせた。次に淡島（淡路島ではない。不詳）を生んだが、子とは認めなかつた

## 田沼と祐司、一人の検討会

「さて、日本書紀の国生みの記事はと言つただね……陽神は陰神に問うて言つた。『あなたの身体でなにか出来上がっているところがありますか』答えて『私の身体ができるがつて陰の始めという一所があります』と言つた。それを聞いて陽神は『私の身体にも出来上がって陽の始めいう一所があります。私の身体の陽の始めでもつて、あなたの身体の陰の始めにあわせようと思つ』と言つた。そのために天の柱を回らうと決めて『あなたは左に回りなさい。私は右に回りましょ』と言つた。

そうして一神は別れて回り、ふたたび出合つた。陰神は言つた。『あらまあ、良い男だこと』陽神はこれに答えて『あれ、まあ良い女だこと』と言つた。ついに夫婦のなす事を果たして、蛭子を生んだ。蛭子は葦の船に乗せて流してやりました。次に淡島（吾恥島）を生みました、これも子供の内には、いれませんでした。このことによつて天に帰り昇つて、そのありさまを細かく天の神に申し上げた。天の神は鹿の骨を焼いて占いなさつて、言われた。『女が最初に声をあげた事がその原因でしよう。もどつてやり直しなさい』と。二神は改めて、また柱を回つた。陽神は左に回り、陰神は右に回つた。お互いが出会つた時に、陽神がまず言つた。『あれ、まあ良い女だこと』陰神が答えて言つた。『あらまあ、良い男だこと』そうした後、富を同じくして共に住んで児を生んだ。・・・・・以上が、書紀の記事だ』

田沼はプリントから田を上げた、そして祐司を見ると言つた。  
「どうかね、古事記と日本書紀の国生みを比べるとどう感じるかね？」

「ふーん。古事記の方がずっとH口チックですね。日本書紀は、極力エロチックを出さないようにしているように見えます。古事記？」

の原文を日本書紀がなおしたとは言いませんが、古事記的な表現が元で日本書紀的な表現が後だと思います。もつとも中には、日本書紀的なモラルある表現を変えて、後宮向けに作つたのが古事記なのだという説もあるそうですが、古事記の表現は、エロチックながら、文学性としては日本書紀をはるかに越えるもので、どうも改作とは考えられない完成度がありますね

「そうだよね、日本書紀は変に、モラルにこだわっている面があるね。古事記は、蛭子を平然と『流し捨てる』のに書紀は蛭子にいたわりの目をもつて、『流してやりました』と書くのだ。古事記の記事と日本書紀の記事の中に、創作年代の違いがまざまざと出ているような感じがするじゃないか。それから・・・生々しい男、女という表現を陽神<sup>おがみ</sup>陰神<sup>めがみ</sup>というソフトな表現にかえているのも、それだね」

## 男一人の検証

祐一は突然声をあげた。「そうか。古事記が日本書紀のダイジェスト版なら、わざわざ、古事記に日本書紀にない別などという古名と思われるふしきな地名を併記したりはしないですよね」

「そうだね。それはいい着眼点だね。別の真実が何であるにしろ、古事記が後宮向けに再編集されたというなら、まるつきり必要な表記だな」

「つまり、古事記が、日本書紀より以前に書かれた事をしめしている証拠ですね」

「そういうことだな・・・さて、次の五の、表記の違いだね。現代表記なら『海月なす漂える』とか、『くらげなすただよえる』とか『クラゲナスタダヨエル』とか色々表記できるのだが、『久羅下那洲多陀用弊流』と表記しなければならないのは、古事記の編纂時は書き言葉がなかつたという事を表していいかな。最初に出来た島『オノゴロシマ』が古事記の表記では、淤能暮呂嶋、日本書紀では？馭慮嶋と違つていて、前者は漢字音によるふりがなであるのが、明白であるが、後者は、どうやら固有名詞化しているように思える。これは古事記が作られた時代には日本には文字がなく、中国渡來の漢字音（漢字には定まった一つの音しかないのだ。たとえば春という漢字にはシユンという読みしかなくジユンとは読まない）を用いて、日本語の音を書き留めたのが、日本文の始まりであったことは忘れてはならない事なんだ。古事記にはその残滓があると言つことだね。一方日本書紀は、『クラゲナスタダヨエル』という表現を、漢字の音を用いて表記するのが、劣等国的であるのを嫌つてか、この表現そのものが用いられてない。日本書紀では『洲壤浮標譬猶遊魚之浮水上也』（國の土は遊漁の水に浮かぶようである）とこれを表記しているのだが、これは漢語の表現で、和語でいうなら『クニツチノウカブハミズニウカブサカナノタダヨエルゴトシ』と書く

ところだが、やはりこれでは田舎臭いから、すっかり漢文に直されてしまつてゐると言つ事だつたね。明らかに日本書紀は古事記の表現を気にしているところどころかな

その時、看護婦長が「コーヒーを一つ入れて、部屋に入つてきた。  
「ああ、婦長さんわざわざいません。忙しいところ気を遣つて頂かなくとも」と、田沼は言つた。

「いいんですよ。私は先生のリゾート病院シリーズの大の愛読者なんですから。ここで、先生の作品が生まれるかと思うと、なだかわくわくしてして、楽しいですから」

「なんだか、恥ずかしいな。こんな、憂さ晴らしひファンがつくなんて」

「オホホ、先生が照れているのは意外に可愛いですね。ところで、田沼先生、血液検査の方。大分結果が良じようですよ。よかつたですね」

「あ、退院はしづらぐ」容赦。よく調べてくださいよ。絶対悪いとこはあるはずです。あ、ほら、痛い痛い、体中がぎすぎすする」

「はいはい。先生は病気です、病気です……」と、いつ言つて起きました。それでは」ゆっくり

祐司は婦長が出て行つてしまつた、言つた。

「婦長さん、先生を、見る目がなんだか妖艶でしたよ」

「よせやい。や、続き続き」田沼は、差し入れのコーヒーをくつと一口飲んでから、祐司の顔を見つめて言つた。

「どうだい、古事記は明らかに、日本書紀よりもずっと古い書だと。判断して良くはないかな。そうだ、もつ一つ忘れてはならないことがある。日本書紀の引用する神々の誕生に引用する「一書」の中に、古事記と思われるものがあることに気がついたかい？」

「え、そなのがありましたっけ」

「ああ」

「それは、どれですか？」

「それと、もうひとつ見逃している、重大な事があるよ」

「え！まだありますか」

「あるさ、大ありだ」

「これは、秘密にしておこうかな」

「先生。」馳走しますから教えてください」

田沼はニヤリと笑つて、「えへへ、嘘だよ。教えてあげるよ。ご馳走は鎌倉プリンスホテルのディナーで、できれば懐石料理がいいな。もちろん沙也香君も誘うんだよ」

「ゲ、キツ！」

「ハハハ・冗談だよ[冗談！」

「ワ、良かつた」

「それじゃ、秘密をばらすか。・・・書紀は古事記と違つて、原典となる文書を列举しているね。それを『一書』として名前を伏せて載せるのだが、その何十もある『一書』の中の一つに『古事記』と思われる『一書』があるのに祐司君は気づいたかな」

「そういえば、似たような文はあるなとチラとは思ったのですが・・・そこまでは」

「ふふん、これは僕が頭が良いと言つことではないんだよ、何というか注意力という年功だらうね。でね、それは日本書紀の巻頭、神代上、第一段にある条なんだ。神々の誕生の条、（田沼は日本書紀を開く）ほら、日本書紀のここの一書がここでは、六書引用しているけれど、その、一番目の一書が似ていると思うのだ。それをちよつと読んでみようか、『一書に曰く、大昔、国が幼く大地が幼い時、例えれば浮かぶ油ごとくに漂つた。その時に國の内に物が成立した。その形は葦の芽の発芽したのに似ていた。これによつて生まれた神がある。可美葦牙彦舅尊と名乗つた。次に国常立尊・・・』

とここまで読んで、田沼は日本書紀において、古事記を取り出した。

「次は、古事記の神々誕生の条を読んでみるね。『国幼くして浮いた油の様であり、クラゲナスタ、ダヨエル時、葦の芽のように生えて、生まれた神が宇魔志阿斯詞備比古遅神・・・ほら、でた、宇とか阿とか斯とか比はやがて、う、あ、し、ひ、といった同じみのひらがなに変わってゆく、ふりがな用漢字だね。日本書紀の、神の名は、現在のわれわれにはふりがなを付けなくては読めないけど、古事記のこの神の名はふりがななしでも読めるというのは、ちょっとした感動だね。なにしろ書紀ですら1300年前の文章だから、古事記の文章はどう考へても1350年前の文章だからね。そのあいだ、読み方が変動しなかつたのは驚きだよ・・・あれ、ワキ道にそれでしまったね。つまり僕がいいたいのは、古事記は日本書紀において一書扱いになつてゐるのではないかということだね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5099y/>

---

太安万侶《おおのやすまろ》古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病

2011年12月17日18時49分発行